アヴニール労務事務所　所長 柿野元博
http://www.avenir-sr.jp
E-Mail avenir4you@gmail.com

編集後記　だいこん役者

「大根引(ひき) 大根で道を 教へけり」という小林一茶の俳句があります。道を尋ねられた農夫が、畑で抜いた大根を指し棒のように使って道を教えてくれたという、のどかな農村の情景をユーモラスに切り取った句です。
「大根」ってなんだかゆるーい感じがする、どこか優しい野菜です。

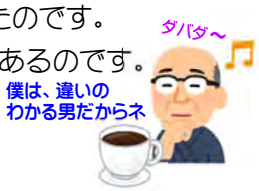


演技の下手な役者を「大根役者」と言いますよね。
最近話題だったドラマ「VIVANT」。僕と同郷・宮崎県出身の堺雅人さんが一人三役をよどみなくこなす姿は、大根役者とは対極の、まさに「千両役者」です。(^o^)
エンタメには「緊張」と「緩和」がありますが、「緩和」少なめの VIVANT のシリアスな展開に少々気後れした僕は、途中離脱してしまいました。子どもの頃から、勇ましい「宇宙戦艦ヤマト」や「ガッチャマン」よりゆる～い「ハクション大魔王」が好きだった僕なので、VIVANT ファンの方はご容赦くださいね。



僕の定番は、中村吉右衛門さん主演の「鬼平犯科帳」。何度も再放送を観てしまいます（笑）。
先日、ガッツ石松さんが出演された回（第１シリーズ７話）を観たとき、技巧だけではない温かさを感じました。
ガッツさん演じる次郎吉は、盗賊でありながら人情に厚い男。不器用なセリフや所作から実直な人柄が伝わり、それが人間臭い「味」となって物語に厚みを与えてくれていました。
原作者の池波正太郎も、ガッツさんの芝居を感じさせない好演を高く評価していたそうです。
かつて遠藤周作は、シロウトが下手なりに全力で遊ぶ劇団「樹座（きざ）」を創設しました。
公演は評判を呼び、帝国劇場などで上演されるほど長く愛されました。
一生懸命なシロウトなりの持ち味を大切にした劇団では、「大根役者」こそが最大の魅力だったのです。
狭い視野では「大根役者」に見えても、広い視野ではその存在のおかげで全体が生きることもあるのです。





職場では、目先の仕事だけで部下や同僚を「できる・できない」で分類しがちです。
ミスの多い「できない」人は、職場における大根役者と受け取られるかもしれません。
でも失敗は誰にでもあること。大根役者に見える同僚の姿は、明日の自分の姿かもしれないのです。
ありきたりの大根を切るのに名刀の正宗をもって切るという「大根を正宗で切る」なんて昔の諺があります。
ミスを名刀を振り下ろすような強い言葉で必要以上に責めれば、指導の域を超え、ハラスメントにもなりかねません。それに、そのような指導は、誰もが正直な報告や発言をすることをためらわない「心理的安全性」のある職場づくりの大きな障壁になるでしょう。
大切なことは責めることよりも、同じミスを本人はもちろん職場の誰もが繰り返さないようにすることです。



ＡＩは広い情報、それは成功だけでなく失敗を含めた情報を蓄積しているからこそ、役に立ってくれるのです。
ＡＩがやっていることに比べりゃ遥かに狭い職場の情報を、共有してノウハウにしないでなんとするのか。(‘o´)/
僕らはＡＩの活用ばかり考えがちですが、その前にそんなＡＩの原理にこそ学びがあるのではないでしょうか。

「大根役者」に見える人も、その人なりの持ち味を生かすことで、やがて職場に欠かせない存在になる可能性だってあります。
お互いの持ち味を知り、気持ちを共有する機会の一つが、忘年会や新年会。



コロナ禍前は企業の約８割が実施していた「忘・新年会」ですが、コロナ禍を超えた 2026 年でも４３％が実施しないとのことで、さらに減少傾向にあるようです。（東京商工リサーチ「2026 年『忘・新年会に関するアンケート企業向け調査』』
日頃の慰労と親睦を目的とした、いわば日本の職場の年末年始の風物詩は、いつか消滅するのかもしれません。
「緊張」と「緩和」で構成されているのは職場も同じです。(˙ー˙)ノ
参加したいと思える工夫があれば、忘年会・新年会は、有効な「緩和」の機会になるのになぁって思っています。

さて、我が家では炊事をしないダメダメの僕ですが、唯一やっているのが、大根おろし。
こんなんでも家の空気が「緩和」に向かうのなら、喜んで大根おろしを頑張ろうと思っています。
家族から不器用だと笑われている僕もまた、大根役者みたいなものですからね。(^_-)-☆

